

〈東北・新潟の活性化応援プログラム〉 2020年 助成団体活動成果レポート

助成団体

秋田若者活性化委員会 FROMPROJECT 秋田

秋田県秋田市

プロジェクト名

FROMPROJECT 秋田 9期、10期



■地域の課題

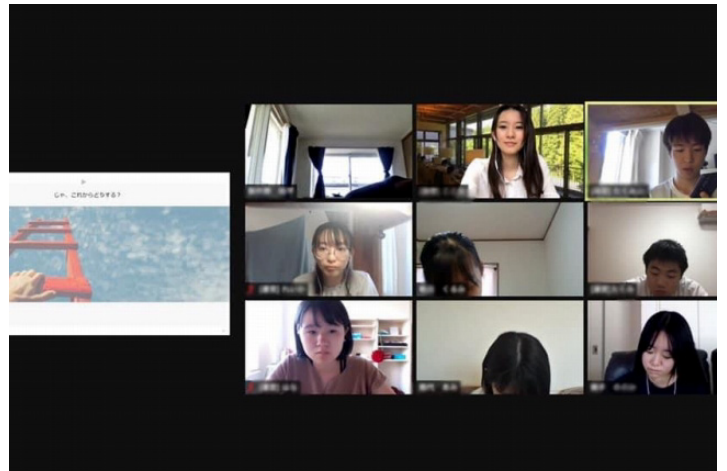
弊団体は二つの地域課題に焦点を当て、プロジェクトを実施しました。

第一に、秋田県には「身の回りの問題を解決したいが何をしたら良いのか分からない」「興味のあるテーマはあるが行動に移すことができない」と考える高校生が多いです。昨年、弊団体が秋田県の高校生を対象に行ったインタビュー調査では、取り組みたいトピックはあるが、アイデアを実現する方法や、誰に相談すればいいのかわからない、という意見が集まりました。こうした現状は、高校生自身の可能性が抑制されるだけでなく、地域が活性化する機会を損失してしまっていると考えます。

この課題を解決するため、当プロジェクトでは、Project-Based Learning(PBL:課題解決型学習)を通して、高校生にアイデアを形にする方法を伝えるとともに、高校生が、大学生や他の参加者と相談しながら、アイデアを行動に移すことのできる場を創出することを目指しました。

次に着目した課題は、地域の大人と若者の繋がりが薄いことです。近年、秋田の地域コミュニティでは、若者の意見を取り入れることで活動をより活発にしたいという動きが見られます。また、若者側にも、地域の大人との活動を通して成長したいという欲求が見受けられます。しかしながら、こうした想いがありながらも、両者が交わるためのノウハウを持つものが少なく、実現できていないケースが多いです。特に、新型コロナウイルスの流行以降、オンラインでの交流が推進され、両者の交流を実現できる人材はさらに制限されてしまいました。

こうした現状を改善するために、当プロジェクトでは、運営大学生と参加高校生が地域の大人と関わる方法を一緒に考え、実行に移すとともに、報告会を通して、蓄積したノウハウや成功事例を、地域コミュニティに還元することを目指しました。



■当団体の紹介

同団体は、国際教養大学の学生有志により設立され、高校生が学校の外に出て、主体的に地域課題の解決に向けて挑戦する機会を提供するとともに、挑戦の過程で関わる地域の社会人との交流により生まれる相互的な学びの場を創出しています。

■具体的な活動は？

9期の活動は、9月から2月までの期間で秋田市、能代市、湯沢市から計15人の高校生とともにオンライン上で行いました。

9期は、当団体史上初のオンラインでの開催だったため、高校生にオンラインでも楽しく、負担なく講座を提供できるよう、オンラインならではのコンテンツを作成するよう工夫しました。参加者からは、「今まで知らなかったアプローチや考え方を身につけることができ、オンライン上でも高校生のことをよく考えてくれたワークショップだった」などの声をいただきました。

内容としては、計8回の講座で、自己分析を通して高校生自身の好きなこと・やりたいことを探すことから始まり、それを実現するための手順とフレームワークを伝え、効果的なプレゼンテーションの方法を学びました。

また、通常の講座に加えて、講演会と最終報告会を開催しました。講演会では、株式会社いろあわせの北川代表を招待し、高校生のプロジェクトに対するコメントや質疑応答を行いました。最終報告会では、秋田市役所の職員の方や、東北電力の方を招待し、プロジェクトのプレゼンテーションと質疑応答を行いました。

10期では計12回の講座及び、中間報告会、最終報告会、そして、2回の講演会を実施しました。

講座は、6月から隔週で行い、夏休み中から9月18日の中間報告会までを第1回プロジェクト実施期間として設け、それ以降から12月11日の最終報告会までの期間を第2回プロジェクト期間として設けました。原則、活動はZoomを使ったオンラインで実施しましたが、10月31日、11月7日、12月12日の3回の講座はにぎわい交流館AUやALVEなどの秋田駅周辺の施設を利用して対面で実施しました。

10期では、10人の高校生がそれぞれ秋田市、横手市、能代市の高校から参加しました。内容としては前期同様、ふるぶろにおけるプロジェクトの説明、自身のやりたいこと探しからそれを実施するまでの手順等を講座内で教えました。

講演会では、ふるぶろ経験者や秋田で活躍している方を招待して、プロジェクトの紹介や質疑応答を行い、高校生に事業経験者からの視点や知識に触れる機会を設けました。

中間報告会では国際教養大学の一般学生、ふるぶろ関係者や事業経験者を招待し、少人数で発表、質疑応答の時間を作りました。高校生からは、高校生だけでは思いつかないアイデアや情報を得ることができ、プロジェクトに新たな視点を取り入れることができた、などの声が集まりました。

中間報告会以降の講座では、改善点の洗い出しや、プロジェクトを修正し再実行するための流れの確認、そして、最終報告会に向けてのプレゼンの仕方、スライドの作り方などを伝えました。

最終報告会では、一般人、AIU生、起業家の方など幅広いバックグラウンドを持つ方を招待し、高校生が1人ずつ発表と質疑応答を行いました。

10期ではプロジェクトの実施するだけでなく、そこからの学びを深堀することに重点を置きました。そのため、前提として活動期間を7ヶ月という長期に設定し、高校生一人一人へのメンタリングを前期より早くから開始することで、長期にわたって高校生のモチベーションを保てるように工夫しました。

また、コロナウイルスが収束してきた段階で、感染症対策を施した上で対面活動を推奨しました。これにより、高校生と大学生のモチベーションをさらに向上させ、学びをより深いものにすることができました。

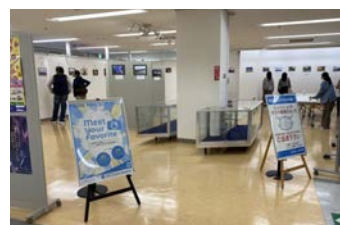
対外的には、当団体の代表・副代表が、ハバタク株式会社の丑田代表と鼎談を行い、秋田魁新聞で取り上げられました。また、株式会社キュービックが運営するサイト「ガクチカ」に、オンライン環境下で活躍する学生団体の一つとして紹介されました。



「地域に寄り添う」防災教室を中学校で開催



オンラインでの中間報告会



高校生による秋田のおすすめ写真展



子ども向け英会話イベントの開催

■活動の成果は？

今回のプロジェクトには、計25名の高校生が参加しました。期間の中で、参加高校生はプロジェクトを企画・実行する方法を学び、実際に全ての高校生が自身のプロジェクトを計画し、実施するに至りました。

高校生が行ったプロジェクトの多くが、地域の若者や大人を巻き込んだものであり、プロジェクトを実施するノウハウが、参加者の垣根を越えて広がったと思われます。例えば、ある高校生がプロジェクトとして開催した写真展は、秋田県内の複数高校の生徒の協力を得て実現するに至り、100人以上の地域の方々に秋田の魅力を発信することができました。他にも、地域の中学校で避難訓練を実施した高校生は、地域のコミュニティのつながりの弱さが災害時の避難行動に悪影響を及ぼしうることを問題視し、総勢200名の中学生を巻き込んで災害時の行動の訓練を行いました。この避難訓練に参加した中学生それぞれが災害時に地域の人々の避難を先導していくことが予想できます。

このように、参加高校生が学びを得ただけではなく、参加者自身のプロジェクトを通して、地域内外の多数の人に影響を与えることができました。

また、9期、10期で開催した報告会には計60人の方にご参加いただき、質疑応答や交流会を通して、地域の方と関わる場を設けることができました。

今回の助成金により、プロジェクト内で新たに二つのことが実施できました。

一つ目は、オンラインでの講座、報告会の開催です。これまでの対面での活動と異なり、9、10期の活動は大半をオンラインで実施しました。そのため、Zoomアカウントの開設やGoogledriveの拡張など、オンライン活動に必須の設備を整えるための費用が必要でした。

次に、高校生がプロジェクトを実施する際の経費補助です。これまで、高校生がプロジェクトを実施する際、備品費用やイベントを宣伝する際の広報費、施設費などの経費を高校生が自身で負担せざるを得ませんでした。しかしながら、今回高校生のプロジェクト経費を一部負担したことで、高校生がプロジェクトを実施するハードルを経済的側面から低くすると共に、事業を企画する際に予算をあわせて考えるプロセスを組み込むことができました。

このようにして、今回の助成金により、オンラインでの活動にもかかわらず、高校生に対面時と遜色ない機会を提供することができました。



自分を象徴するものを持ち寄り自己紹介



初の対面講座の様子



大学生と高校生との対話を大切に講座



中学生に向けた受験対策講座を開催

団体からのコメント

これまでふろぶろ秋田9期はZoomを活用した完全オンライン、10期は計3回の対面講座を実施するも、主にオンラインにて活動してきました。11期では、コロナウイルスの蔓延状況を加味しつつ、8期以前と同様に可能な限り対面での実施に戻していきたいと考えています。

10期までのオンライン実施では、講座の休憩時間や終了後などに高校生同士で雑談をする時間を確保することができず、折角やる気のある高校生が多く集まっているにもかかわらず互いの仲を深めることが困難であるという課題が浮かび上がりました。したがって来期では、多種多様な経験をもつ参加高校生たちの意見交換をより容易にし、例えば、プロジェクト作成の基本となる自分自身にとっての幸せを表す個益、社会にとっての幸せを表す公益を発見する際に自分一人や運営大学生の意見だけではなく同年代の様々な視点をもつ高校生たちの意見を聞いて、より深くより面白いアプローチの方法を見つけることができるようにサポートしていきたいと考えています。

完全対面の実現には、物理的距離が離れてしまう秋田市外の学生のアクセスの確保や、国際教養大学構内が入校許可証を受けた者以外立ち入り禁止である事による秋田市内施設利用費の大幅な増加、加えて運営交通費の確保等、課題は多く残っています。

加えて、9期、10期では多くて二度しか実施することのできなかった講演会の充実を図りたいとも考えています。それは、運営メンバーが大学生であるということもあり、高校生に伝えられることはやはり限られているため、外部の経験豊富な方の視点を取り入れることは、高校生のプロジェクトやその将来に違う角度から好影響をもたらすことに繋がると考えているからです。それゆえに、10期では二度しか実施できなかった反省から、来期では早期から準備を進める予定です。

その他の面についても運営内で話し合い、これまでのふろぶろの良い点はより良く、改善点はしっかり改めながら、高校生や社会にとって少しでもグッドインパクトを与えられる団体であり続けられるよう尽力していきます。

当団体が抱える課題は大きく2つあります。

まず、運営大学生の活動拘束時間が長いことです。運営が学生である以上、当団体の活動と、勉強やアルバイトなど他活動との両立は必須になります。しかしながら、団体の運営業務に加え、講座や報告会の準備、参加高校生へのメンタリングなど、運営の拘束時間が多くなってしまいました。原因としては、参加高校生に対して運営大学生の人数が不足していたことに加え、日々のMTGや、講座、報告会準備の効率的な手法が運営内で共有されていなかったことにあると考えます。

次に、個々の運営大学生によって、高校生へのメンタリングの質に差が生じてしまうことです。ふろぶろ秋田では、高校生支援の一環としてメンター制度を取り入れ、一人の高校生に一人の大学生メンターをつけて個々人のプロジェクトをサポートします。この制度は、運営大学生と参加高校生が一对一で関わる時間を増やすことができる一方で、高校生との時間の使い方が各大学生に委ねられます。特に、当団体では現段階でメンタリングについてのガイドラインが整備できていないため、メンタリングのメソッドが人それぞれで異なる結果となりました。したがって高校生のプロジェクトの達成度にばらつきが生じたり、高校生との関わり方に疑問や不安を覚えたままメンタリングを行い、運営自身が精神的に負担を感じる事例がありました。

今後は、再現性の高い活動を目標にし、全ての運営が一定の価値を高校生に提供できるよう、運営の能力開発に力を入れます。大きな課題であるメンタリングについて、ガイドラインを作成し、運営内で研修を実施するとともに、実施状況とノウハウの共有を高頻度で行うための運営制度を整えます。

また、運営間の情報共有のあり方についても改善の余地があります。これまでの定例MTGは、限られた情報の報告を行う場としての機能に限定されていたため、運営間でフランクに情報交換や相談を行う機会が少なかったです。これらを踏まえ、定例MTGのあり方を見直し、より効率的な共有と議論のできる時間を設けます。

さらに、講座や報告会の準備については、講座コンテンツを蓄積し、期をまたいで利用できるフォーマットを作成することや、会場施設の情報や事務作業の手順をまとめた資料を作成するなど、一定の質を担保したまま業務効率化を進める予定です。これらを達成するために、運営自身が各所の研修や、書籍でのインプットを行うことを推進し、得た知識を高校生や地域に還元することを目指します。